

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川厚生病院医誌 (1999.06) 9巻1号:42～45.

乳頭状汗管嚢胞腺腫と基底細胞癌を合併した脂腺母斑の1例

南 仁子, 佐藤恵美, 坂井博之

乳頭状汗管嚢胞腺腫と基底細胞癌を合併した脂腺母斑の1例

南 仁子 佐藤 恵美 坂井 博之

要 旨

61歳女性の頭頂部に生じた乳頭状汗管嚢胞腺腫と基底細胞癌が合併した脂腺母斑の1例を報告した。5歳ころから頭頂部の脱毛を伴う皮疹に気づいていたが、初診の約3年前から同部に紅色丘疹が出現、徐々に隆起増大した。組織学的に脂腺母斑から生じた乳頭状汗管嚢胞腺腫および基底細胞癌と診断した。治療として腫瘍切除および局所皮弁術を行った。

Key Words : 脂腺母斑, 乳頭状汗管嚢胞腺腫, 基底細胞癌

はじめに

脂腺母斑は primary epithelial germ の異常により発生する疾患と考えられており、細胞の分化の方向や程度の相違により種々の腫瘍が発生しうるとされている。今回われわれは、乳頭状汗管嚢胞腺腫と基底細胞癌を生じた脂腺母斑の1例を経験したので報告する。

I. 症 例

症例：61歳，女性

初診：1998年5月6日

主訴：頭頂部の自覚症状を伴わない皮疹。

既往歴：特記すべきことなし。

家族歴：特記すべきことなし。

現病歴：5歳ころから頭頂部の脱毛を伴う皮疹に気づいていた。初診の約3年前から同部に紅色皮疹が出現し、徐々に隆起増大してきたため当科を受診した。

現症：頭頂部に25×15mm大の淡黄褐色の不整形脱毛局面があり、その中央には8×8×10mm大の鮮紅色、表面が顆粒状で湿潤した結節が認められる。この結節は有茎性で下方の脱毛局面とは一部分でのみつながっており、茎の反対側から持ち上げると、中央がふくらんだ円盤状になっている。また、結節とは非連続性に脱毛局面内には2×2mm大までの黒色斑が数カ所点在している(図1)。

治療および経過：帽状腱膜上で腫瘍を切除し、局所皮弁術(Rhomboid-to-W flap)を行った。術後4カ月経過したが再発は認めない。

病理組織学的所見：表皮は一部肥厚しているが、明らかな脂腺の増殖は認めない。臨床的に有茎性紅色結節を呈した部分の表皮は、著明な乳頭状増殖を示し、表皮から真皮へ向かって多数の管腔構造が複雑に交差して絨毛様突起を形成している(図2)。管腔は2層の細胞からなり、間質側は核が円形で細胞は立方状、管腔側は核が楕円形で細胞は円柱状で、間質には形質細胞およびリンパ球様細胞の浸潤を認める。また、一部に断頭分泌と思われる像も認められた(図3)。臨床的に黒色斑を呈した部分は、表皮から連続する好塩基性の腫瘍塊で(図4)、基底細胞様細胞により構成され、辺縁は柵状配列を呈し、周囲間質との間に裂隙が認められる(図5)。

以上の臨床像、組織学的所見から本症例を乳頭状汗管嚢胞腺腫と基底細胞癌を合併した脂腺母斑と診断した。

II. 考 按

脂腺母斑は、被髪頭部に好発する先天性形態異常で、life historyに基づき全3期に分類される。第1期は出生時から小児期までの毛包脂腺系が未発達な時期で、脱毛性局面を形成する。第2期は思春期以降で脂腺増殖、アポクリン腺の発育が顕著となり、表皮は乳頭状に肥厚し、疣贅状ないし結節状となる。第3期は中年

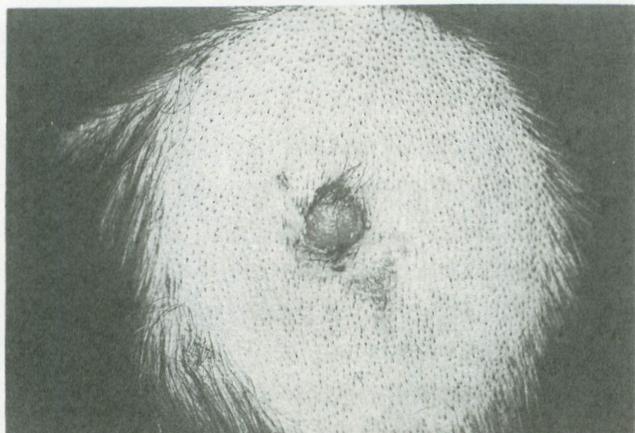


図1 頭頂部に淡黄褐色の不整形局面を認め、その中央に鮮紅色、表面顆粒状の結節および局面内には数カ所の黒色斑をみる。

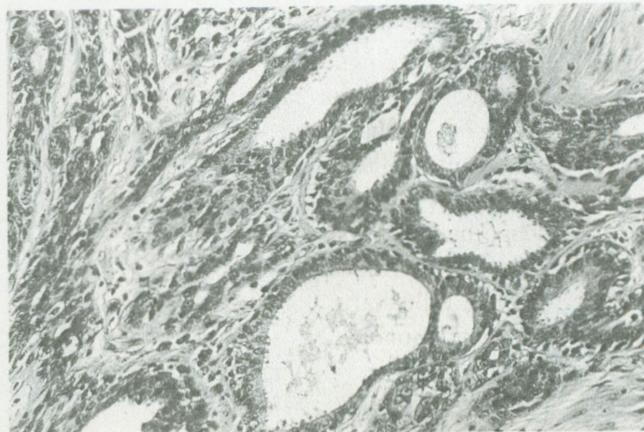


図3 管腔は2層の細胞からなり、間質には多数の形質細胞の浸潤を認める。一部に断頭分泌の像が認められる。

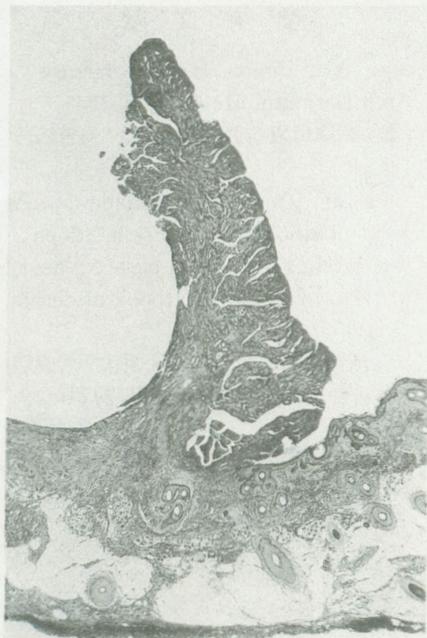


図2 表皮から連続して有茎状に突出した腫瘍があり、表面は著明な乳頭状増殖を示す。

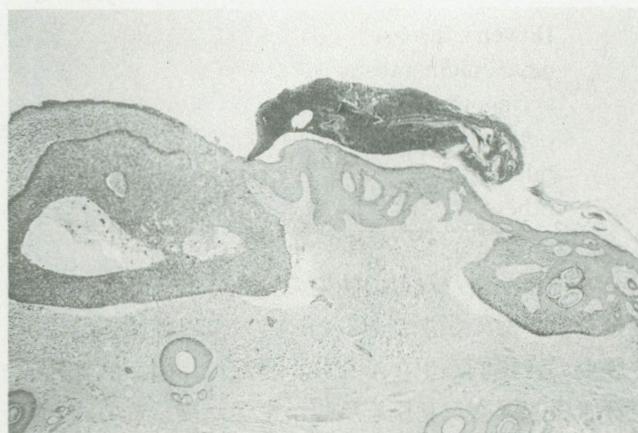


図4 表皮から連続して好塩基性細胞の集塊をいくつか認めた。

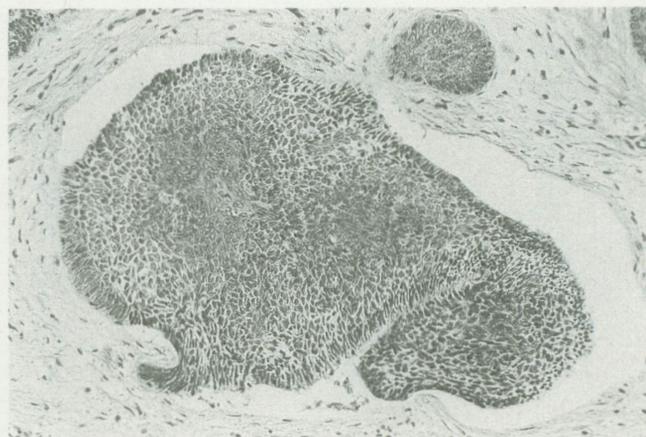


図5 腫瘍塊を構成する細胞は基底細胞様細胞で、辺縁は柵状配列を呈し、周囲間質との間に裂隙も認められた。

以降で良性ないし悪性腫瘍の発生する時期とされる¹⁾。この第3期に発生する2次性腫瘍は主に、毛包系、汗腺系、脂腺系などの皮膚付属器腫瘍であるため、脂腺母斑は organoid nevus¹⁾ または pilo-syringo-sebaceous nevus²⁾ ともいわれ、primary epithelial germ の異常を起源として発生する疾患とされている³⁾。脂腺母斑は全新生児の0.3%に認めるとされ⁴⁾、幼少児期までに親が気づく場合が多い。

実際に発生する2次性腫瘍には乳頭状汗管囊胞腺腫、

基底細胞癌、脂腺上皮腫などが頻度が高く、その他ケラトアクトーマや trichilemmoma, clear cell hi-

表1 脂腺母斑に続発する腫瘍

| |
|---------------------------------|
| basal cell carcinoma |
| syringocystadenoma papilliferum |
| sebaceous epithelioma |
| sebaceous adenoma |
| kerathoacanthoma |
| sebaceous carcinoma |
| clear cell hidradenoma |
| poroma folliculare |
| trichilemmoma |
| squamous cell carcinoma |
| proliferating epidermal cyst |
| verrucous trichilemmal tumor |
| apocrine hidrocystoma |
| apocrine epithelioma |
| apocrine adenoma |
| apocrine nevus |
| Bowen's disease |
| nevus pigmentosus |
| syringoma |
| pilomatricoma |
| pilar cyst |
| others |

dradenoma, また既存の腫瘍の分類にあてはまらない場合など多数の報告がある(表1)。また数種類の二次性腫瘍の合併例も少なくない。われわれの症例は乳頭状汗管嚢胞腺腫と基底細胞癌が生じたが、この両者の合併は今まで本邦皮膚科領域からは自験例も含めて25例報告されており、比較的よく見られる二次性腫瘍の組み合わせと思われる。臨床的にはそれぞれ鮮紅色有

茎性結節と黒色斑を呈しており、臨床像は組織像とともに典型と考えられる。したがって本症例では、組織学的に基底細胞癌と診断された病変は臨床的にも黒色斑として認められ、術前に診断が可能であった。しかしながら脂腺母斑に続発して生じる基底細胞癌は、臨床的には基底細胞癌特有の黒色調を呈さず、切除後にはじめて組織学的に診断されることも多いとされている⁵⁾。また稀に脂腺母斑から脂腺癌が生じ、転移を来して初めて脂腺癌の確定診断がされたとの報告もある⁶⁾。以上のように、脂腺母斑からの続発性悪性腫瘍は臨床診断が困難な場合があり、発見が遅れる可能性がある。そのため脂腺母斑は2次性腫瘍出現の前、すなわち第2期の思春期までに切除するのが望ましいと考えられる。

参 考 文 献

- 1) Mehregan AH, Pinkus H: Life history of organoid nevi. Arch Dermatol 91: 574-588, 1965.
- 2) 森岡貞雄: 脂腺母斑の life history. 皮膚病診療 5: 390-397, 1983.
- 3) Elder D, et al: Tumor of the Epidermal Appendages, Lever's histopathology of the skin, 8th ed: 763-765.
- 4) Champion RH, Burton JL, et al: Naevi and other Developmental Defects. Textbook of dermatology, 6th ed: 534-536.
- 5) 持田耕己, ほか: 脂腺母斑上に乳頭状汗管嚢胞腺腫と基底細胞上皮腫を生じた1例. 臨床皮膚科 45: 1083-1086. 1991.
- 6) 堀 真, ほか: 脂腺母斑上に発生した脂腺癌, 西日本皮膚 44: 543-551, 1982.

A Case of Sebaceous Nevus with Syringocystadenoma Papilliferum and Basal Cell Carcinoma

Masako MINAMI, Emi SATOH, Hiroyuki SAKAI

Key words : Sebaceous nevus, Syringocystadenoma papilliferum, Basal cell carcinoma

Dept. of Dermatology, Asahikawa Kosei Hospital, 1-24, Asahikawa 078-8211, Japan